

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

白滝姫 泉に降る栗の花



伝説 白滝姫
泉に降る栗の花

紀行 山田の里と白滝姫の伝説を訪ねる

- ・白滝姫が歩いた道
- ・栗花落の森
- ・栗花落の井
- ・山田の里
- ・箱木千年家
- ・六條八幡神社
- ・成道寺
- ・無動寺・若王子神社
- ・下谷上農村歌舞伎舞台

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

白滝姫

泉に降る栗の花

昔、六甲山（ろっこうさん）の北にある山田の里に、左衛門（さえもん）という男が住んでいました。あるとき左衛門は都へ出て、御所の庭仕事にやとわれることになりました。

ある日、庭をはいていると、いつもは中が見えない御殿（ごてん）のすだれが上がっています。そっと近づいてのぞいてみると、そこにはたいそう美しいお姫さまが座っていました。このお姫さまは、右大臣藤原豊成（ふじわらのとよなり）の娘で白滝姫（しらたきひめ）といました。白滝姫は、そのころ都でいちばん美しいと評判だった中将姫（ちゅうじょうひめ）の妹でした。

左衛門は一目見るなり、すっかり白滝姫のことを好きになってしまいました。

「あんなお姫さんが、およめさんになってくれたら、ほんまに幸せやろなあ。」

それ以来左衛門の心は、白滝姫のことでいっぱいになってしまいました。右大臣の娘と左衛門とでは、あまりにも身分がちがいます。けれどもあきらめようと思えば思うほど、白滝姫を思う気持ちは強くなるのでした。

そしてとうとう左衛門は、せつない心を歌によんで姫に送ることにしました。

水無月の 稲葉（いなば）のつゆも こがるるに 雲井を落ちぬ 白滝の糸

しかし、姫からの返事には、こんな歌が書かれていたのです。

雲だにも かからぬ峰（みね）の 白滝を さのみな恋ひそ 山田男よ

雲もかからないほどの高い山のように、身分の高い私です。あきらめなさい。そんな意味でした。けれども左衛門はあきらめきれません。もう一度、歌を送りました。

水無月の 稲葉の末も こがるるに 山田に落ちよ 白滝の水

この歌を知った父の豊成には、左衛門がまことの心で白滝姫を思っていることがわかりました。話を聞いた天皇も、姫を左衛門のおよめさんにするようにすすめました。

こうして、左衛門は白滝姫をおよめさんにむかえ、姫といっしょによるこびいさんで山田の里へと帰ってゆきました。

京の都から山陽道（さんようどう）をたどり、ようやく神戸の平野についてひと休みしていると、里の人たちがひどい干ばつで困っているようすです。それを聞いた白滝姫が、手に持っていたつえで地面をつつくと、そこからはみるみるうちに清らかな水がわき始めましたので、里の人たちはたいへん喜びました。

烏原（からすはら）から急な坂を登り、長坂山をこえて、ふたりはようやく山田の里に着きました。

ちょうど梅雨に入ろうとする季節です。山田の里には、栗（くり）の花がさいていました。それにしても左衛門の家は、白滝姫がこれまでに見たこともないようなあばら屋です。夜になると、屋根のすきまから月の光がもれてくるほどでした。

左衛門は貧しいながらもけんめいに働き、白滝姫との間には男の子も生まれました。しかし白滝姫にとっては、なれない山里の暮らしです。体はしだいに弱り、とうとう病気にかかって、ある年の梅雨のころ、幼い子を残して死んでしまったのです。

悲しみにうちひしがれた左衛門は、姫を手厚くほうむりました。するとその墓の前から、清らかな泉がわきだし、水面に栗の花が散り落ちたそうです。それから毎年、白滝姫が亡くなったころになると、泉には清水が満ちあふれて、決まって栗の花が散り落ちるのです。

そこで左衛門は姓を栗花落（つゆ）と改め、泉のわきにお堂を建てて姫を祭りました。やがてその泉も、栗花落の井戸と呼ばれるようになりました。

今でも左衛門の子孫が、この井戸を祭っています。そして、白滝姫がつえについて泉をわかせた所は栗花落（つゆ）の森と呼ばれ、神戸の都由乃町（つゆのちょう）で大切に守られています。

紀行「山田の里と白滝姫の伝説を訪ねる」

白滝姫が歩いた道

山田左衛門（やまださえもん）と白滝姫（しらたきひめ）が山田の里へ入るとき、都からどのような道をたどったのだろうか。もちろん伝説の話であるから、現実のとおりとは限らないが、奈良の都を出た二人は、山陽道（さんようどう）をたどって神戸までやってきた。現在の兵庫区から山田町へ向かうならば、有馬街道（ありまかいどう）を登って東の箕谷（みのたに）から入る道筋が中心であろうが、山陽道から有馬街道を登るなら、都由乃町（つゆのちょう）では少し行き過ぎている。二人がたどった道は、おそらく烏原古道（からすはらこどう）と呼ばれる道であつたらう。

烏原道は、都由乃町付近から石井川に沿って烏原 鈴蘭台（すずらんだい）と山を登り、さらに長坂山の東を越えて山田里に入る。しかし道も十分に整わない古代のことである。急な坂は、二人の息を切らせたことだろう。その急坂を登る手前にゆかりの地があるということが、伝説にいっそうの現実味を与えてくれる。

栗花落の森

兵庫区都由乃町に、白滝姫を祭る栗花落の森（つゆのもり）がある。新湊川（しんみなとがわ）の石井橋から少し山手へ歩いたところにある、落ち着いた家並みの古い住宅街の間を抜ける道。車が通れないほどの細道をたどり、さらに細い路地へ折れると、家が並んだ一角に小さな祠（ほこら）があつて、2本のエノキの巨樹が、それを覆うようにそびえていた。

閑静な住宅地の中に祭られている祠は、質素だがきれいに掃き清められていて、心優しい白滝姫にふさわしく思える。かんぱつに苦しむ人々を救おうと、白滝姫が湧かせた泉は、もう見るできないけれど、耳をすませば今も水音が聞こえるような場所である。



栗花落の森



白滝姫の祠



栗花落の井

栗花落の井（つゆのい）は、山田の里の原野地区にある。山田道から、車一台がかりで通れる道に入ってゆくと、柵（さく）に囲まれて一宇のお堂がある。そのきれいに整備された小径をたどると、白滝姫の伝説を記した立て札があり、そのお堂の下が「栗花落の井」であった。

長方形の石組みがある井戸は、さほどの深さもない。しかし毎年梅雨のころになると必ず清水がわき出し、どんな日照りでも秋までかれることがないというのは、不思議な話である。この井戸は、主人公である山田左衛門尉真勝（やまださえものじょうさねかつ）の子孫（栗花落氏）によって整備され、今も大切に祭られているというから、子孫にとっても地元の人々にとっても、まさしく伝説が生きている場所である。

栗花落の井にわく水は、水路をめくり、あたりの田を潤してきた。「白滝姫」という美しい名とともに、伝説は里人の間で息づいてきたのだろう。



栗花落の井



栗花落の井



栗花落の井(説明板)

山田の里

山田の里は、南に裏六甲のなだらかな山並み、北を丹生山（たんじょうさん）、帝釈山（たいしゃくさん）の険しい山塊にはさまれた小さな盆地である。風光明媚（ふうこうめいび）な山里は、しかしのどかなだけの場所ではなかった。

山田の里を東西に横切る山田道を西へ抜けると、そこはもう摂津（せつつ）と播磨（はりま）の国境である。こうした場所柄、中世から近世にかけては、何度か争いの舞台にもなったのである。一方で山田道を通じて多くの文化がもたらされ、すぐれた文化財がいくつも残されている。

箱木千年家

山田の里の西の端、吞吐ダム（のとだむ）のそばに残されているのが、箱木千年家（はこぎせんねんや）である。もとは山田川に沿った場所にあったのだが、ダム建築にともなって現在の場所に移された。現在、日本に残されている中では最古の民家とされている。箱木家は、山田地区でも有力な家柄であったそうだが、その重厚なたたずまいは過ぎ去った時間そのもののように思えてくる。



箱木千年家

棟が高く、軒が低いのは、古い民家の特徴である。中は土間と板間の質素な造り。土間の一角はうまやになっていて、かつてはここに牛馬が繋がれていた。人も牛馬も、一つ屋根の下で暮らしていたのである。

箱木千年家
(土間)箱木千年家
(屋根の構造)

六條八幡神社

山田の里には、寺社が不思議なほど多い。その中でまず訪ねたのが、六條八幡神社（ろくじょうはちまんじんじゃ）であった。ここは、旧山田村13か村の鎮守である。山田道から300mほど北に入った場所にあり、山すそから村を見守っている。拝殿・本殿よりも、三重の塔の落ち着いた風格に目を奪われた。社殿わきに、他を圧するようにそびえる巨大なイチョウも印象的である。



六條八幡神社(参道から)

六條八幡神社
(三重の塔)

六條八幡神社

成道寺

六條八幡神社から東へのびる道をたどると、成道寺（じょうどうじ）に着く。堂坊は新しいが、明治時代に廃寺となった安養寺（あんようじ）、福昌寺（ふくしょうじ）の石塔や仏像が集められている。また毎年8月16日には、施餓鬼会が催され、そのあと安養寺から伝わったという六音太鼓念仏（ろくさいたいこねんぶつ）がおこなわれている。



成道寺(門)

成道寺
(五輪塔)

成道寺(全景)

無動寺・若王子神社

六條八幡神社から成道寺に向かう道を、中ほどで折れて山を登ると、無動寺（むどうじ）と若王子神社（わかおうじじんじゃ）に至る。小鳥のさえずりしか聞こえない森の中に、ひっそりと建つ寺社であるが、山登りやハイキングの人たちが、連れ立って参拝してゆく姿が思いのほか多い。

聖徳太子が開いたと伝えられる無動寺には、平安時代の仏像5体が残されていて、いずれも重要文化財に指定されている。その森のさらに奥に、若王子神社の社殿がある。森の中の社殿は落ち着いた風情で、こちらも重要文化財である。

無動寺から下ってきた細い道のわきに、「新兵衛石（しんべえいし）」と刻まれた一抱えほどの石がある。これは江戸時代中ごろ、かんばつにあって苦しんでいた山田村の庄屋（しょうや）の子新兵衛が、年貢の軽減を直訴し、これが聞き届けられたことを記念して残されたものだという。



若王子神社(拝殿)



若王子神社(鳥居)



若王子神社(拝殿)

下谷上農村歌舞伎舞台

山田の里の東端にある、天彦根神社（あまつひこねじんじゃ）の境内には、江戸時代に造られた農村歌舞伎舞台が残されている。かつては村祭りの時などに、農民自身が歌舞伎や演劇をおこなった舞台である。農民が、歌舞伎や芝居を楽しむことは禁じられていた時代のことだが、「神社に奉納する」形で楽しんだと言われている。まさに庶民の反骨、知恵と言うべきだろう。



下谷上農村歌舞伎舞台



下谷上農村歌舞伎舞台
(説明板)

よく保存された重厚な建物で、農民たちの力だけで、よくここまでのものを造り、また演じ続けられたものだと賛嘆させられる。楽しみを求める。その気持ちが、人々が生きる力になっていたのかもしれない。



農村歌舞伎



農村歌舞伎

用語解説

【烏原古道】からすはらこどう

現在の神戸市兵庫区と、北区山田町を結んでいた古街道。平清盛が丹生山（たんじょうさん）に参詣する際に通った道とも言われ、古代には重要な道路であったと考えられる。明治44年に刊行された『西撰大観』（仲彦三郎編）によれば、湊川、石井川沿いに烏原越えの道が示されているという。その経路の概略は、兵庫区から石井川沿いに菊水山の西を通り、小部、北五葉を抜け、長坂山の東を越えて山田、丹生神社に至るというものであったとされる。

現在は神戸電鉄がこの道と重複しているほか、ダムの建設、ニュータウン開発などによって、多くの部分が消滅、通行不能、あるいは位置不明となってしまった。

【山田道】やまだみち

現在の神戸市北区山田町の、中央を流れる山田川に沿って、東西にはしる街道。古代から山陽道の裏道として利用されていた。西宮市の生瀬から、有馬温泉、三木市までを結ぶ道を湯山街道（ゆのやまかいどう）というが、この湯山街道の西半にあたる、三木～有馬間の北回りの淡河道（おうごみち）であり、南回りが山田道であった。

山田道は古代から、都に通じる山間の動脈として利用されたため、さまざまな文化が流入し、周辺には数多くの文化財が残されている。

【山田庄】やまだのしょう

現在の神戸市北区山田を中心とした地域にあった荘園。平安時代には東大寺領であったが、後に平清盛が領有し、平氏滅亡後は源頼朝が接收されて、京都市内にあった若宮八幡宮に寄進された。

播磨国淡河庄（おうごしょう）と境界を接し、室町時代に至るまで境界争いが絶えなかった。

南北朝期には、南朝方の拠点となったため、北朝方の赤松氏との間で戦闘が繰り返された。また織田信長の中国地方攻略に伴い、三木城の合戦が起きると、別所長治は花熊城・丹生寺城・淡河城から三木城までの食糧運搬ルートを確保しようとしたため、羽柴秀吉は、この切断のために丹生寺城を攻略した。

【箱木千年家】はこぎせんねんや

神戸市北区山田町衝原にある中世民家。「箱木家住宅」が正式名称である。箱木家は、山田庄の地侍で、14～15世紀にはこの地域の中心的な一族であったとされる。住宅は、かつては山田川に臨む台地上にあり、江戸時代にはすでに千年家と呼ばれていた。

しかし1970年代におこなわれた呑吐（どんと）ダムの建設によって、住宅が水没することとなったため、解体、移築されたものである。

移築の際におこなわれた調査により、姫路市安富町の皆河千年家（みなごせんねんや）とともに、現存する日本最古の民家であることが確認された。また解体前の箱木家住宅が、中世に建てられた母屋と、江戸時代中期に改築されたはなれを、江戸時代末期に一棟につないだ建物であったことも明らかとなっている。移築後は母屋とはなれを分離して、建築当初の状況が再現されている。国指定重要文化財。

ひょうご伝説紀行 「白滝姫」泉に降る栗の花

【六條八幡神社】ろくじょうはちまんじんじゃ

神戸市北区山田町中にある神社。祭神は応神天皇。山田庄十三村（藍那、西下、東下、中、福地、原野、上谷上、下谷上、小河、坂本、衝原、東小部、西小部）の総鎮守。境内には三重塔、薬師堂などがあり、かつての神仏習合の姿をとどめている。

伝承によれば、神宮皇后の行宮（あんぐう）であったとされ、10世紀に宝殿が造営されたという。12世紀前半に、源為義（みなもとのためよし）が山田庄の領主となり、京都の六条にあった若宮八幡宮を勧請（かんじょう）し、現在の六條八幡神社のもととなった。

三重塔は、15世紀中ごろに建てられたもので、檜皮葺（ひわだぶき）、高さ13.2mをはかる。室町時代の整美な建築として、国の重要文化財に指定されている。

【無動寺】むどうじ

神戸市北区山田町福地にある真言宗の寺院。若王山（にやくおうさん）と号する。現在の無動寺の位置には、かつて若王山福寺があったが、衰微して明治時代に廃寺となった。その福寺跡に、村の菩提寺であった無動寺が移転して現在に至っているという。寺伝によれば福寺は、聖徳太子が物部守屋（もののべのもりや）との戦いの勝利を念じて作らせた仏像を、本尊として創建されたという。その正確な創建年代は不明だが、現在無動寺に所蔵される仏像の製作年代から、平安時代後期には成立していたものと思われる。

所蔵される、大日如来坐像、釈迦如来坐像、阿弥陀如来坐像の三尊仏、不動明王坐像、十一面観音立像は、いずれも平安時代後期の仏像として、国の重要文化財に指定されている。

【若王子神社】にやくおうじじんじゃ

神戸市北区山田町福地にある神社。福地村の鎮守。勧請（かんじょう）は13世紀末ごろと考えられる。現在の建物は15世紀初めに再建されたもので、国の重要文化財。

かつては神社に隣接して、大日如来を本尊とする若王山福寺があったが、寺が衰微した後は若王子神社に大日堂が付随する形となった。さらに明治の神仏分離令によって、大日堂にあった本尊が、村の菩提寺であった無動寺に引き継がれて現在に至っている。

【農村歌舞伎】のうそんかぶき

農村部で演じられる歌舞伎。土地の人々によって演じられる、素人芝居である。

江戸時代になると農村部に歌舞伎が浸透し、職業的な劇団による歌舞伎の上演もおこなわれるようになったが、幕府は農民の遊興やこれにともなう金の消費を止めるため、遊芸、歌舞伎、浄瑠璃（じょうり）、踊りなどを厳しく禁じ、歌舞伎関係者が村に入ることも禁止した（地芝居禁止令：1799年）。

しかし村人自身が演じて、「神社に奉納する」という形式をとった農村歌舞伎は、容認せざるを得なかったようで、天保の改革などで厳しく取り締まられた時期はあったものの、江戸時代を通じて継続し、明治時代にも盛んであった。しかし昭和に入って戦時体制が強まると、地芝居そのものの継続ができず消滅していった。

戦後は高度経済成長にともなって、農村そのものが変質してゆき、農村歌舞伎は失われていった。しかし近年、郷土の文化が見直されはじめて、兵庫県下でも葛畑（かずらはた）の農村歌舞伎、播州歌舞伎や、都市から郊外に移り住んだ住民なども参加する形態も見られるようになり、十指に余る農村歌舞伎、子供歌舞伎などが復活、上演されている。

下谷上農村歌舞伎舞台は、江戸時代末に建てられたもので、代表的な農村歌舞伎舞台として国指定の重要有形民俗文化財に指定されている。また、山田地区周辺には、各村に農村歌舞伎舞台が残されている。

ひょうご伝説紀行 「白滝姫」泉に降る栗の花

【藤原豊成】ふじわらのとよなり

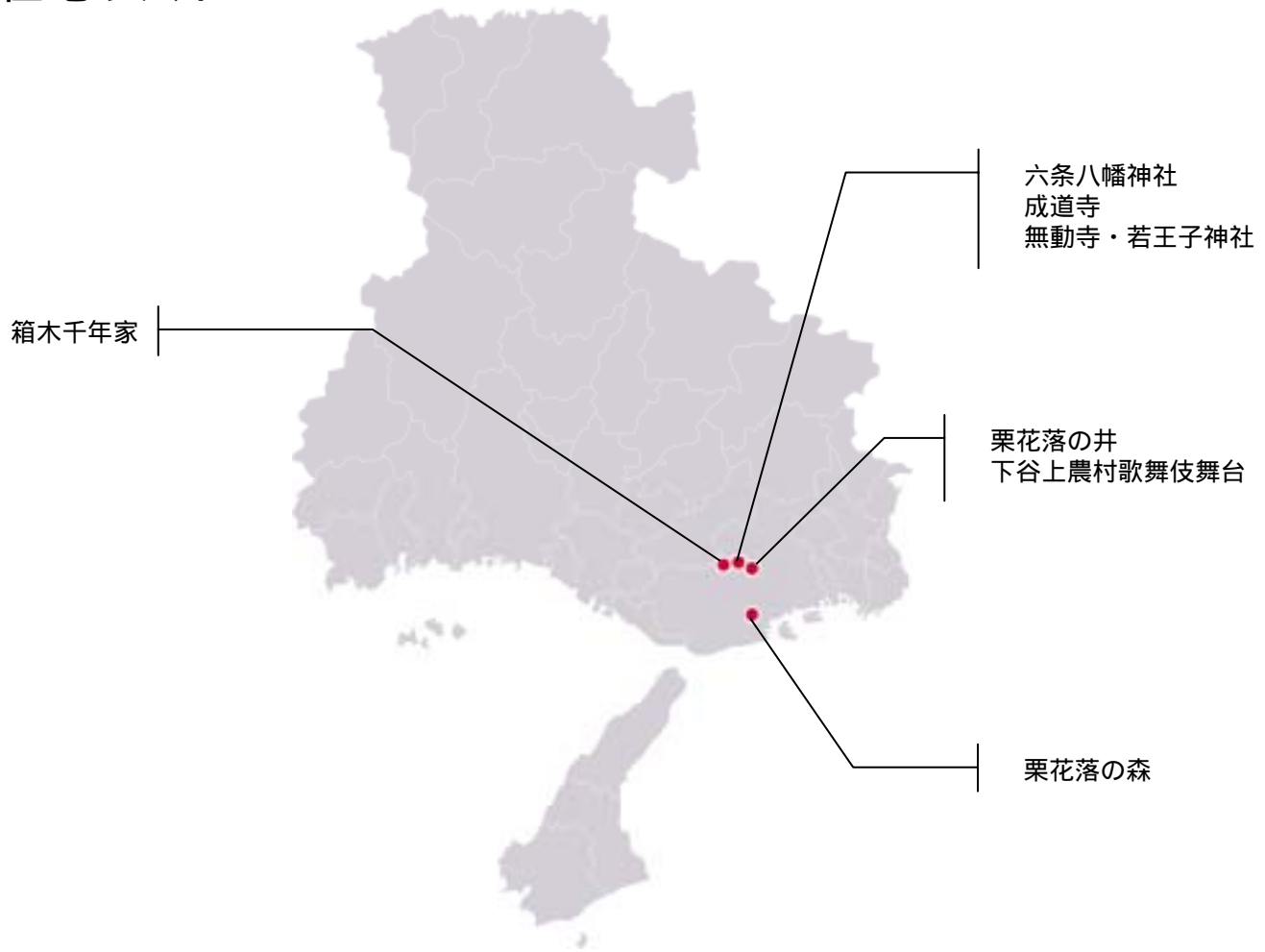
奈良時代の貴族（704～766）。難波大臣。737年におきた天然痘の流行で父と兄弟が急死したために、藤原氏の中心人物として浮上した。

749年に右大臣となったが、弟藤原仲麻呂と対立して政権の外に押し出され気味となり翌年の橘奈良麻呂の乱に連座して大宰府に流されることになった。しかしこれに抗議し、「病気」と称して難波にあった自分の別荘に籠ったため、大宰府行きは無期延期状態となり、そこで8年間の隠遁（いんとん）生活を送った。764年、仲麻呂が道鏡排斥に失敗して殺害された後（藤原仲麻呂の乱）、従一位右大臣として政権の中枢に復帰した。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫のむかしばなし釈講	1978	船知慧	中央出版エージェント
	兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎・足立巻一	角川書店
	神戸の伝説散歩	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	兵庫のふるさと散歩 1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県の地名 日本歴史地名大系第29巻	1999	平凡社地方資料センター編	平凡社

所在地リスト



栗花落の森	神戸市兵庫区都由乃町2
栗花落の井	神戸市北区山田町原野
箱木千年家	神戸市北区山田町衝原
六条八幡神社	神戸市北区山田町中字宮ノ片57
成道寺	神戸市北区山田町原野字天神26
無動寺・若王子神社	神戸市北区山田町福地字新地101
下谷上農村歌舞伎舞台	神戸市北区山田町下谷上宮前

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日